國學院大學学術情報リポジトリ

大学図書館とコミュニティ：戦略的大学図書館経営を視野に入れて (特集 コミュニティをつくる図書館)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安達, 匠, Adachi, Shou
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000005

◆特集◆コミュニティをつくる図書館

大学図書館とコミュニティ

●戦略的大学図書館経営を視野に入れて

安達　匠

はじめに

大学図書館におけるコミュニティはさまざまなケースが想定できよう。もともとその母体である大学そのものが学生を中心とした多くの人の集う機関であり，コミュニティが自然と形成されていく場である。では多くのコミュニティが存在する大学に所属する図書館である大学図書館はどのようにコミュニティと関わるのであろうか，この場をお借りして一試論を提示していきたい。

1　大学図書館の利用とコミュニティ

公共図書館や学校図書館も含めたほとんどの図書館では，「図書館の利用」は利用者と資料の接触であり，基本的な利用は単独利用に重きをおいている。もちろんこれは大学図書館においても例外ではない。資料の利用は個人の集中力を要するため，静寂を旨としており，他者の音を遮断・緩和することが重要とされている。一番わかりやすい事例は「読書」であり，図書館内の音への注意喚起はこれに起因する。わざわざ騒音の中で読書に親しむ人は少ない。多くの図書館資料，主として図書を例にすれば，静寂の中で資料と接することが，より充実して資料を利活用できることとなる。

こうしたなかで，従来の図書館利用とは方向性を反転させるように思えるが，図書館内で集団によって形成されるコミュニティの発生する事例のあることに気づかされる。学修・教育・研究の支援をサービスの根底に置く大学図書館においても，この傾向が表層化してきている。

なお本稿では，コミュニティは実際の人の集いを指している。その場合でも，意識して集まったコミュニティと，無意識下に組織となったコミュニティは存在しよう。ここではその両面の性質を持ったコミュニティを扱っていく。

この図書館でのコミュニティ，特に大学図書館においては，イベント，施設，利用の３面が提示できよう。まずこの３面について触れていきたい。

2　イベントにおけるコミュニティ

図書館内でのイベントにもさまざまな内容がある。公共図書館に限らず種々の図書館においてホームページ等で各種のイベントが確認できる[1)]。イベントの対象は多くは利用者となるが，なかには図書館員等運営側の研鑽を目的としたものも散見される。近年大学図書館においても，学生・教職員を対象としたさまざまなイベントが開催されている。書店と連携した学生対象の「選書ツアー」などは多くの大学図書館で実施しており，ほぼ定番となったといえよう。また好みの図書を激論のうえ紹介し合う「ビブリオバトル」

あだち　しょう：國學院大學図書館
キーワード：大学図書館，コミュニティ，図書館間連携，社会連携，戦略的図書館経営，地域コラボレーション

は，参加者の白熱で会場が火照るほどのイベントである。

そうしたなかで，早くから開催されたイベントが利用者ガイダンスであろう[2)]。本来図書館の利用は個別利用を中心とすることは先に触れたが，大学図書館は，新規構成員としての大学新入生がそれまで触れてきた公共図書館や学校図書館とは，蔵書数からはじまりその規模等構造でも大きく異なる。そのため，学修成果を結実させるためにも，利用方法を教示すべきガイダンスが実施される。大学図書館ごとにその規模や構造，サービス内容や方法まで異なるため，大学図書館に慣れている教職員であっても，大学や学部等所属が替わればガイダンスへの参加が望まれる。

このガイダンスも，図書館員が学生を主とした利用者にマンツーマンによる個別で対応すれば，その利用者ごとの特性に特化した事項を強調して案内することは可能になり，実り多い内容になる。しかし，毎年一定数で増加する新入生を中心とした新規構成員全員に個別対応を実施すれば，その時間と労力たるや計り知れないものとなり，大学図書館がオーバーワークとなろう。そこで多くの大学図書館では当然のように，集団に対する説明会であるガイダンスが実施されている。ガイダンスは個々の関心や理解度，習得状況は考慮していないものの，共通項目として一定量の情報提供が可能になり，最低限の情報共有がなされる。そして当然ながら，図書館側では大幅な省力化がなされる。もちろん情報共有する内容を少しでも専門化・高度化するために，学部学科・学年等の専門領域や習熟度ごとのガイダンスを実施するなど各大学図書館での工夫もみられ，ここに各々の集団を形成させていく。

このようなイベントにより，自主性の単数人型を主とする図書館サービスが，複数人型に拡充したことにより，早くからコミュニティを形成する場としての機能が散見されていた。

こうしたガイダンスは，図書館と利用者が直接接する機会でもあり，かけがえのない時といえる。大学図書館においてはこのガイダンスを通して，さらに利用方法を享受することにより互いに図書館理解について同レベルのコミュニティとして意識を高める工夫がされており，図書館内の学内者コミュニティ形成の助長のシステムとなっている。

3　施設におけるコミュニティ

施設についても図書館内での多様化が目に付く。図書館の発生・発展を考慮すれば，基本的には書架と閲覧スペースで構成されるのは当然のことである。しかしその延長に，どのようなサービスを展開するか，またどのような資料を提供するか，こうした視点から施設・設備の拡充・改善が現在まで，そして未来もそれが継続されていくことが想定される。

大学図書館では早い段階から「グループ学習室」が整備されてきた。これは大学の正課授業等で課されたグループ課題の共同の作業場であることは当然として，現在のようにアクティブラーニングが叫ばれる以前から，グループによるディスカッションを通して研究の研鑽を積み，またそこに資料を挟みながら討論を進めることで，より研究が発展する効果が期待され設置されてきた。これは個人的な意見でもあるが，大学内での学生たちの研究や思考のディスカッションは，学生としての彼らのさらなる発展を垣間見るようで大学人としては喜ばしくもあり，知の殿堂としての大学らしさもうかがえる。

施設に話を戻すと，近年，資料や施設・設備の発展から「ラーニングコモンズ」が大学内に設置されたことは周知のことである。ラーニングコモンズの設置や内容に関する議論は少なからずあるなかで，特にその導入当初は図書館内にその施設を備える事例が散見された[3)]。

大学そのものが学修・教育・研究支援施設であるものの，図書館はその最前線であり，そのうえ膨大な資料を排した図書館に学修・教育・研究支援の施設を盛り込むことも一案であり，ラーニングコモンズをはじめ，多くの大学内の支援事業に大学図書館が関わっている事例は少なくない。

グループ学習室やラーニングコモンズの使用方法はさまざまであり，先のとおり資料を介してコミュニティの活性化を促す施設となっている。こうした大学図書館の施設からコミュニティが発生するとともに，コミュニティを熟成させる機会となっている。

4　利用におけるコミュニティ

大学図書館内のコミュニティについては，大学構成員である学生・教職員のコミュニティがまず想起されよう。大学構成員という母集団の中に，学部学科専攻等の組織ごとのコミュニティ，そして大学の正課内外に属したコミュニティなど学内だけでもさまざまなコミュニティが存在している。さらに，コミュニティの場として大学図書館を検討する際に，社会連携は外すことはできない。なお，地域への連携や開放は，地域連携や地域開放，社会連携等さまざまな呼び方をされる。細かくはそれぞれ意味が異なるものの，ここでは特定の場合を除き基本的に社会連携と記す。

そもそも大学図書館の利用対象者について検討すると，個々の大学という施設内の構成員に適した資料の構築からはじまり，サービスも基本的にその延長で構成員を対象に設定している。その上研究支援も重要であるため，大学図書館そのものが専門図書館の要素が強いことは周知のことである。また，本来大学図書館は個々の大学の構成員を主対象とした機関であるため，会員制図書館としての位置づけもある。特に学費等納付金を主な収入源として運営している私立大学において，そのことを考慮すれば，大学図書館の利用対象は在学生・教職員等の構成員はもちろんのこと，利用対象を拡大したとしてもかつて学費等を納付した卒業生までとなる。

しかし，本来の図書館活動を検討したとき，その大学図書館を構築している蔵書やサービスを地域等外部に開放することで，大きい意味での学修・教育・研究支援に結合することを考慮すれば，構成員だけの施設である必要はなくなる。結果として提供した大学そのものに教育・研究面での刺激を与える存在になりうることも想定でき，一概に利用の制限を設ける必要はない。大学図書館の発展にも大きく寄与しよう。

このような背景の下，改めて社会連携を中心に，大学図書館のコミュニティについて論じていきたい。

5　大学図書館と社会連携

大学図書館の社会連携の壁は決して低くなく，文教大学越谷図書館（埼玉県越谷市）は1981年の新図書館開館時から学外者に開放しているが，これはかなり早い段階の珍しい事例といえる[4)]。また，國學院大學の神奈川県横浜市北部に位置するたまプラーザキャンパス（横浜市青葉区）の図書館において，年度ごとの有料制の登録とはいえ早くからマスコミ等社会に注目されたことは，大学図書館の地域への開放そのものが先駆的であったことに起因しよう[5)]。その後，運営費交付金等高い比率で国や地方自治体からの支出により運営されている国公立大学[6)]の図書館において社会連携が進んだことにより，研究を目的とする国民や地域住民に利用を開放する流れとなった。

大学図書館，特に国立大学図書館の社会連携の促進の背景には，1993年の学術審議会報告書「大学図書館機能の強化・高度化の推進について（報告）」がある。大学図書館について「公共図書館では提供しえない高度な学術情報を地域社会や市民へ積極的に公開し，生涯学習活動が期待される」「大学図書館が地域における図書館ネットワークに積極的に協力し，市民が直接利用する公共図書館や地方公共団体との相互協力関係の下に，こうした地域社会や市民へのサービスを提供することも考えられる」と記している[7)]。

そして2010年の科学技術・学術審議会／学術分科会／研究環境基盤部会／学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像」において「1. 大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置づけ」で，「大学の機能として，特に国立大学の場合には，社会・地域連携の一翼を担う組織としての位置づけや，社会に対して開かれた存在であるということが望まれる。大学図書館としても，一般市民に対する開放をはじめ，展示会や講習会の実施等，保有する情報資源や人材を活用して，社会・地域連携に積極的に取り組む

必要がある。また，特に公共図書館との連携は重要」とその要点について的確に触れている[8]。

また近年，私立大学においても私学助成金の調査項目に地域への開放の項目が盛り込まれ，多くの私立大学図書館で社会連携を率先して行うことになったことも，私立大学図書館を中心に社会連携に拍車をかける形となった[9]。

大学図書館の社会連携は決して自主的に展開されたものばかりではなく，こうした政策的対応もあって進んだことは否定できない。また，社会連携を実施した大学図書館においても，消極的な対応を示す例は少なくない。その多くは大学図書館においては課題を抱えたまま連携に踏み込んだことに起因している[10]。国立音楽大学図書館のように，大学図書館の特長でもある専門的・特殊資料を学外利用者に提供することで利用を困難にさせる事例なども散見される。年齢制限を設けたうえで，音楽大学の図書館なので，音楽についての調査・研究を目的としていることを学外者の資料の利用に対して求めているが，そうしたうえでも学外者への開放には問題が付きまとう[11]。

このような課題を内在させながらも，大学図書館における社会連携は何を生み出し，どのような効用が期待できるのであろうか。もちろん図書館の使命としてランガナタンの『図書館学の五法則』の第五法則「図書館は成長する有機体である（A library is a growing organism.）」に基づくことは忘れてはならない。従来の利用対象である大学構成員を超え，大学外にも利用を促進していくことこそ「成長する有機体」の証である。しかし地方が中心とはいえ，現在５割近くが入学者数の定員割れを起こしている私立大学において[12]，その土台である大学自体が危機的状態にあるときに，図書館における哲学・倫理観を通すことは難しい。近未来さえ大学そのものが緊迫している状態で，大学図書館の社会連携の実施の意味を見いだすことは困難であろう。それこそ明確な効用が見えなければ，実施の必然性は薄れていき，大学図書館以外の大学内でのコンセンサスを取ることが難しくなろう。

先の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像」には，すでに社会連携の重要な要点が列記されているが，改めて大学構成員以外への利用の開放は何を意味するのか，これについて説いてみたい。

6　社会連携の意義
――学内コミュニティの形成

先述のとおり，高い専門的蔵書構成を誇り，なおかつその規模的には国立国会図書館に次ぐ大規模図書館が連なる大学図書館が社会連携を進めることで，知の独占から知の開放といった意味合いが強まる。また，これは蔵書の学外者利用という開放ばかりではなく，学外者への大学図書館施設開放をも意味しており，空間の閉塞から空間の開放へと促されている。こうした事業内容は，ドイツ中世都市に関する法諺“都市の空気は自由にする（Stadtluft macht frei）”を想起させ，大学内外の利用者の自由な発想まで促されるようである。

大学自体の社会への開放としては，体育施設や学生食堂，購買施設等の利用開放も対象であろうが，学術的な開放に視点を定めると，生涯学習として正課授業の受講や，生涯学習に則したオープンカレッジ等特別授業の開催，イベントとしての学術講演会等が挙げられよう。また大学博物館等大学内の常設施設での所蔵資料の展示・公開も，社会開放の一環といえる。こうした大学の学術的な社会連携として実施している事業への参加者を，大学図書館への利用を促すことは自然な流れである。大学の社会連携事業で知的欲求を高めた学外利用者が大学図書館の資料を利用することで，さらに知的・学術的向上が望めることは想像に難くない。大学開放そのものとの一体化が顕在化される。

それではそのように知の開放を行った大学図書館には，何が生まれるのであろうか。生涯学習講座の受講，講演会への参加，学内展示の観覧の後に，大学図書館の利用により，開放された事業から生まれたコミュニティを成長させ，そこからさまざまな形での情報発信や研究成果の醸成など化学反応を起こした結果を生み出す。

こうした構成員以外からの成果の期待や還元こそが，学内コミュニティを育てるうえでの重要なポイントとなろう。

7　社会連携の意義
――学外コミュニティの形成

大学図書館の社会連携を外に向けると，外部の第一の接触組織として各地域に根差した公共図書館があり，この公共図書館との連携こそが大学図書館の外部との連携であり，学外でのコミュニティ形成の場となろう。

「産学官連携」を含め，大学の社会連携は叫ばれて久しい。こうした大学の社会や地域との事業連携が散見されるなか，その一環として大学図書館と公共図書館の連携はその一施策であり，重要な基盤となり得よう。

コミュニティを形成するための基盤として社会連携を想定すると，そこには公共図書館との連携も視野に入る。施設・組織の連携を実施することで，コミュニティ形成の大きな助勢となることも無視できない。

そのなかで大学図書館と公共図書館の相互利用は，最も簡単な連携事業といえよう。しかし人や資料が行き交う単なる相互利用にとどまらず，大学図書館の持つ学術的な専門性が，その地域の特性を活性化させることになれば高次元での連携が見出せる。そこには大学と周辺組織を巻き込んだ大きなコミュニティが生まれ，相互の組織にとって有効な連携となろう。

東京都千代田区と区内の明治大学図書館中央図書館（千代田区駿河台）・法政大学図書館市ヶ谷キャンパス（千代田区市ヶ谷）など９大学・11大学図書館との連携事業はその有効な事例であろう。区の保有するビジネス街や神田古本街などの特性と大学図書館の特長を融合させ，さまざまなコミュニティ形成へと導き，事業展開へと発展している点は注目に値する[13]。

こうした社会連携によって大学内外で形成されたコミュニティは，そのコミュニティを発達させることは当然として，大学図書館そして大学そのものの存在感を高めることになり，メディアのパブリシティを含め，広報的展開へと発展することも期待できる。

8　大学図書館の社会連携とコミュニティ

『変わりゆく大学図書館』第12章「地域連携」では，「大学図書館が地域に開放されることは今日，常識に近いものとなった。課題はそれが単なる門戸開放にとどまらず，積極的なサービスとなり得て，大学構成員にも地域社会にも肯定的なものとなるか否か，一方的な『開放』ではなく，両者にメリットのある連携，すなわち『地域コラボレーション』となるか，である。」と記されている[14]。

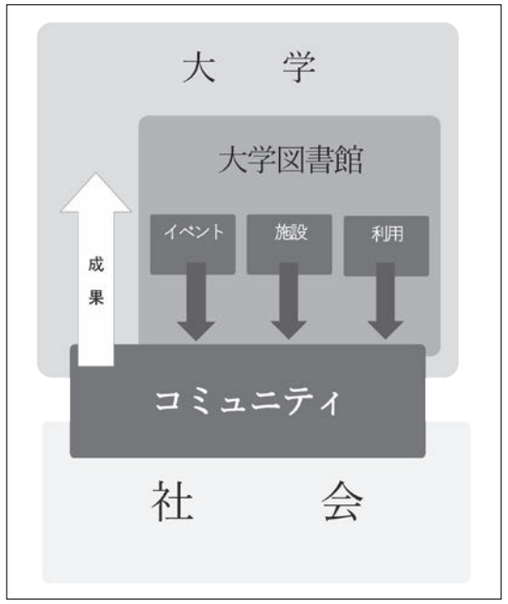
先の千代田区の事例などは地域コラボレーションとしての成功例と見ることができるが，ここでの重要なポイントは，地域社会はもちろん大学図書館との両者にメリットとなる点である。特に開放した側である大学図書館にとって地域開放がコミュニティを生み，そのコミュニティから各大学の欲する資産が発生するモデルが最も希望的な形であろう。

先述のとおり，図書館主催のイベントや館内施設にもコミュニティは内在しており，イベント・施設・社会連携等の利用におけるこれらのコミュニティを融合することが大学図書館はもちろん，大学そのものの活性化につながることが望まれよう。

そもそも図書館は蔵書を中心とした資料という「資産」を有する施設である。この資産をもとに，積極的な事業を進めていくことこそ図書館の運営ではあるまいか。資産運用をすることで，自分たちの組織に還元される事業。特に大学図書館は膨大な学術情報という価値の高い資産を有している。この資産の有効活用こそが，今後の大学図書館の行く末となり得る。

もともと大学図書館は学修・教育・研究支援という形で，学生・教職員に投資を行い，その成果として学位の取得や研究業績等を得てきたともいえる。視点を変え，大学図書館の資産をコミュニティに投資して，そのコミュニティから有効な成果を大学図書館，むしろ大学が受容することが戦

図１　大学図書館とコミュニティの関連図



略的大学図書館経営の一つといえる。そしてこうした戦略的大学図書館経営の下に，コミュニティを生み，発展させていくことが，大学そのものの活性化の一手段となろう。専門性の高い，規模の大きい大学図書館ならではのコミュニティを生み出し，活性化させたモデルを作り出すことが，大学図書館における大きな課題となろう（**図１**）。

まとめにかえて

図書館が行動したとき，コミュニティが友好的に活性化する。個別利用時の沈黙したコミュニティが雄弁なコミュニティに変革していく。

コミュニティが，大学図書館あるいはその経営母体となる大学そのものへの還元ということに特化できれば，コミュニティそのものが広報的意味合いをもち，最終的に大学運営に貢献するという解釈は簡単に想起される。しかし，もっと実益として戦略的に大学運営に関わる資源としての可能性を内在しており，今後そこを明示し，促進していくことが大学図書館の使命ともなろう。成果を求めることは即物的とも見えるが，それは大学図書館の可能性の追求であり，それこそ大学図書館が有機的に発展していくための道標ではなかろうか。大学図書館が個々の利用者に接することに従事するのではなく，コミュニティの形成と発展に目を向けることが大学存続の一助となる可能性を秘めていることを結びとしたい。

＜注＞

１）例えば，筑波大学附属図書館「イベント」
https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/events，
東京都立図書館「イベント情報」
http://www.library.metro.tokyo.jp/event/tabid/1225/Default.aspx（2017-08-25 参照）

２）ガイダンス等利用者教育をイベントと区別する事例もあろうが，ここでは図書館が主催する企画・催しとしてガイダンスやオリエンテーションもイベントの一種と捉えた。

３）お茶の水女子大学附属図書館，国際基督教大学図書館，東京女子大学図書館などがラーニングコモンズを初期導入した施設として挙げられよう。なお，ラーニングコモンズについては多くの文献が見受けられるが，大学図書館問題研究会主催のオープンカレッジをまとめた「ラーニング・コモンズ：学びの場の新しいカタチ」2009（大図研シリーズ No.25）など比較的早い時期の報告書である。

４）藤倉恵一．文教大学越谷図書館における学外開放．大学図書館研究．76, 2006, p.21-31（小特集：社会連携）．

５）「大学図書館を開放　国学院大学たまプラーザキャンパス横浜」朝日新聞 1992 年 10 月 22 日朝刊神奈川面
きわめて先進的な試みで，成果を注目したい，と当時の私立大学図書館協会東地区担当事務局長のコメントも記されている。

６）財務省ホームページ「国立大学の収入構造」
http://www.mof.go.jp/zaisei/matome/zaiseia271124/kengi/02/04/kokuritsu01.html（2017-08-25 参照）

７）国立大学図書館協会ホームページ「大学図書館機能の強化・高度化の推進について（報告）」
http://www.janul.jp/j/documents/mext/houkoku.html（2017-08-25 参照）

８）文部科学省ホームページ「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm（2017-08-25 参照）

９）例えば「私立大学等経常費補助金配分基準別記７（特別補助）」の中に「Ⅰ　各大学等の特色を活かせるきめ細かな支援／6．地域活性化貢献支援メニュー／3 総合的な地域活性化事業支援／(2)大学等施設の開放」に施設開放に則した補助金配分基準が明記されている。2011 年３月，日本私立学校振興・共済事業団
http://www.shigaku.go.jp/files/s_tokuho22y.pdf（2017-08-25 参照）

10）小特集：地域連携の組織活動．大学の図書館．19（5），2000．
小特集：大学図書館の地域開放．大学の図書館．23（5），2004．
小特集：社会連携．大学図書館研究．76，2006．など

11）市川啓子，南部好江．主題を限った大学図書館の公開―国立音楽大学附属図書館の取り組みから．図書館雑誌．94（10），2000，p.774-775，（特集：大学図書館の地域開放）．

12）日本私立学校振興・共済事業団 私学経営情報センター．平成 28（2016）年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向．2016-08．
http://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukou283.pdf（2017-08-25 参照）

13）廣岡康久．法政大学図書館の社会連携― 一つの試み．大学図書館研究．76, 2006, p.41-48.（小特集：社会連携）．
千代田区と大学の連携については千代田区ホームページ「区内大学，専修・各種学校等と区の連携協力」を参照。
http://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kurashi/volunteer/renke/index.html（2017-08-25 参照）

14）逸村裕．地域連携．変わりゆく大学図書館．勁草書房，2005, p.154.

（2017.9.4 受理）